アジア観光地を旅し、日本を振り返る

稲葉　伸一
社団法人近畿化学協会化学技術アドバイザー
神戸大学工学部応用化学科 非常勤講師他

１．はじめに

私は仕事での海外出張や、退職後に母を伴った家族旅行を、欧米を中心として行ってきた。近年、中国を含めたアジアを旅することが増え、欧米では見せない日本人旅行者の発言･行動から「日本に欠けているもの、失いつつあるもの」が見えてきたと感じている。　ベトナム、カンボジア、トルコ、中国で写した多くの写真をご紹介すると共に、シンガポール、インドネシアを含めたアジアから見える「日本」を語りたい。

２．新興国の力強さ

最近、アジアの時代だと言われ始めた。中国はBRICｓ、シンガポールは先進国、タイ・トルコ・インドネシア・ベトナムは新興国とされているが、どの国も住民のバイタリティーにはものすごさを感じる。　建設ラッシュや自然破壊も無いとは言えないが、多くの宗教（仏教、道教、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教等）が激烈な闘争の末バランスを持った共存関係にあり、柔らかい印象を受ける。　また、アジアの国々の基本は農業国である。高層ビルが建ち並び、建設中のビルがたくさんあっても、少し外れるとそこには田畑が広がっている。　アジアの国々は農業を大切にしながら産業を振興しようとしている。　農業を大切にするということは、自然環境を守ることに繋がり、ベトナムで聞いた刈り取り後の落ち穂や二番穂は家畜や野鳥の餌になるとの話は感動すらも覚えたのであった。　トルコは食料自給率100％を誇る一方で、輸出のトップ３は自動車、機械類、鉄鋼（相手国はドイツ、イギリス、イタリア）という事実もある。

東南アジアでは中国・中国人の圧倒的な影響を見聞したが、かって属国であったり、経済的に支配されていた国も多く、親しみと対抗意識との微妙なバランスを感じた。　料理、文字、制度などに色濃く中国文化の影響を残しながら、直接的な関与には拒否反応も示していた。一方、カンボジアのプノンペンに中国企業が縫製工場を建設し、従業員の教育から始めている姿勢に「感謝」の声を聞き、新しい中国を感じると共に、箱物さえ建設すれば援助だと言って

きた日本の ODA の限界も感じたのであった。　また、人種・身分に制限を設けず優秀な人材を登用する中国「科挙」の制度は各国で今も脈々と受け継がれている片鱗を見てきた。

３．観光は産業になるか

アジアには民族芸能、郷土の土産物、独特な料理、自然そのものの価値、文化遺産などが多く、さらに底流に素朴な人柄がある。　これらの資産の伝承は、国家滅亡の危機や植民地化の経験から醸成されたと思われ、伝統民族文化の再興（フィナーレでは**観客参加型**も）と、観光と開発のためのインフラ投資（粗悪グレードとの批判もあるが）が着実になされつつある。

海外からの観光客に対しては、外資ホテルや快適交通機関などを整備し、国内の生活レベルとかけ離れた好待遇で遇しているが、大きなホテルにはホテル内業務、客室整備・清掃、調理、グリーンキーパー、土産物店など多くの人達が直接、間接に雇用されており、歓迎の雰囲気を感じる場面が多かった。（チベット族には、現代文化や中国文化を取り入れようとする人達と、古い風習を頑なに守ろうとしている人達の対立があった）

民芸品の販売では、基本的に製造販売であり手芸の場面を見せ、巧みな口上（日本語も）と、素朴な対応（子供達も第一線で働いている）や値切りの楽しみまで味合わせてくれる。　ただ、旅行者と見ると高い価格を示しているようで、ホーチミン市の中央郵便局内にある土産物屋のように、正札が付き上質の土産物を販売するシステムも拡がっている。

観光が産業として成り立つには、**リピーターや口コミによる新規観光客の獲得**が不可欠だが、アジアの国々は、世界遺産、伝統文化（民族舞踊、音楽、衣装）、自然美、遺跡、博物館・美術館、歓迎（言語、案内、土産・買物）、食事、安全、清潔、冒険、インフラ（道路、空港、水、電気、通信）、近代設備（建造美、宿泊施設、トイレ）などが整備されつつあり、「観光産業」が育っているのを肌で感じたのであった。

４．アジアの歴史と宗教への理解を

前項でも取り上げたが、「世界遺産」にはその歴史的背景が大きな意味を持っており、アジアには日本より古く栄えた歴史が多くあり、その子孫・後継者である人達がそれらに対する誇りを持っていることを理解すべきであろう。　一方、歴史的に見ると世界の人類は闘争と移動をくり返しており、現在は基本的に多民族国家になっているという認識も必要だ。

アジア各地の観光地で感じたのは、欧州と同様、**過去（歴史）は忘れないが、拘りはしない**という基本線であった。　ベトナムホーチミン市の戦争証跡博物館での公平な展示（淡々と数

字と図で説明し、レクイエムの展示ではアメリカ兵も被害者の一人として扱っていた。日本人ジャーナリストの貢献を高く評価し一部日本語での展示もあった)にもそれを見ることができ、インドネシア、シンガポールでも同様であった。　侵略したり、植民地化したりしたのは日本だけではなく、歴史の一場面にすぎないとの認識であろう。　現在のベトナム最大の輸出相手国はベトナム戦争（1960～1975 年）を戦ったアメリカであり、輸入相手国は中越戦争（1979 年）を戦った中国である。　ベトナム戦争で最後まで多くの兵士を派遣していた韓国が貿易、観光両面で大お得意様になっている。

宗教もバラエティに富んでおり、伝承地域宗教と民族の移動、かっての支配者による国教化政策の歴史などにより、モザイク状になって多くの宗教が並存している。　アジアにはイスラム教が広く伝播しており、観光を楽しむにもイスラム教を少しは知って欲しい。　イスラム教では、１日５回の礼拝、アラーが唯一の神であると認める、ラマダン、聖地巡礼（巡礼を終えた人はイスラム教のルールに完全に従う)、貧しい人への施し（１回／年）などが、ベースになっている。　例えばトルコでは貧しい東を豊かな西が支えることで国が成り立っていることへの理解が必要である。

世界文化遺産については、先住民族の遺産であっても自国の歴史（自国民族にはこだわらない）として、そして少数民族保護などのために活用されている。　特に中国でそれを感じた。例えば、1992 年に自然遺産に登録された四川省にある「九寨溝」。　空港やホテル群（統合汚水処理施設設置)、道路の建設、自然保護区（有料）の整備をすると同時に、その周辺家屋の整備と関連設備を建設してチベット族雇用を義務づけており、民族舞踊ではアイドル的なチベット族舞踊者が育っていた。　また、三峡ダムの完成によって新たに少数民族（例えば土家族）の民俗芸能会館が建設されたり、かって入れなかった少数民族が住む峡谷に新たな観光地ができていた。

余談ではあるが、三峡ダムの完成により、下流の水害防止、発電、重慶の港に大型船舶が着岸可能などの主目的達成だけでなく、流れが緩やかになって水運が非常に活発になったり、水位が上がって潅漑が容易になり換金作物として有利なオレンジなどの果樹栽培が増えたり、養魚事業が活発になるなど大きな波及効果を見てきた。

５．アジアの現実と日本の将来

アジアを旅すると 20 年～50 年前の日本を思い出す。　現在の日本と比較すると、物質的には貧しく、みすぼらしい服装で働く子供達も多く見たが、人なつっこく、その瞳は輝いていた。

また、来客、親族を大切にする人々にもお会いしました。　中国の一人っ子政策の下に生まれた**次男**の方から、御両親に対する感謝の念をお聞きすると、涙ぐんでしまいました。

アジアは多くの民族、宗教が入り交じり、協調と戦い（支配、被支配）の連続で、欧州列強の植民地支配も経験していますが、自分達が独立（革命）を勝ち取ったとの自信がありました。トルコ人は元々モンゴルから新疆地区に住む遊牧民族で、モンゴル族やウイグル族に追われて現在の地に逃れ、11 世紀頃からセルジューク朝やオスマントルコ帝国を経て、国家存亡の危機に 1923 年ケマル・アタチュルクによりトルコ共和国となったのです。　各国で独立を勝ち取った英雄（ベトナムのホーチミン、中国の毛沢東、カンボジアのシアヌークなど）への敬愛と現在の政治リーダーに対する信頼感（批判精神は持つが）に接すると羨ましささえ感じた。

ベトナムのホイアン（海のシルクロード中継地）で、16～17 世紀に朱印船に乗った日本人が多く到来し、日本人街も形成されていた事実を知り、江戸幕府の「鎖国政策」が良きにつけ悪しきにつけ現在の日本に影響を及ぼしたと再認識した。　日本でもグローバル化が叫ばれてるが、世界中に中華街を作り、それぞれの国に**住み着いている**中国人には比べようがありません。

不思議に思ったのは、旅行者に比べ圧倒的に貧しい人々（国内でも結構所得格差がある。一般公務員の給料は低くアルバイトに精を出しているそうだ。これも戦後の日本と同じ）から険悪な雰囲気を感じなかったことです。　一つの理由を市場やスーパーマーケット、屋台や粗末な庶民食堂に見た。　ピンからキリ（日本では規格外として商品化されない穀物、野菜、果物、乾物などが一桁以上安い価格で）までの商品が並び、小遣い銭で食事ができる環境があり、収入が少なくても生活ができるようになっていた。　戦後の高架下やバラックでの市の記憶がかすかに残る世代として、あの頃は「夢」が有ったと納得してしまった。　かってインドネシアの地方都市郊外の粗末で汚い食堂で食べた食事（モツとキシメン様うどん、野菜の炒め物）は非常に美味であった。

日本からの観光客は欧米に対する態度とは違い、平気で日本語でまくし立てる方々も多く、「お客様は神様です」を体感でき、「親日的」だと満足されている場面を多く見たが、彼等から何かを吸収しようとの姿勢は殆ど感じられなかった。　積極的に外資を導入し急速に近代化を進めているアジアの国々は、戦後日本の復興とバブル崩壊後の衰退を勉強している。　その第一線の人々（観光客と直接接する人達はある種のエリートです）から得る、情報と智恵は得難いモノでは。

アジアの人々は自分達の歴史を周辺国との関係を含め**長いスパン**で、冷静に学習し伝えている。　振り返って、多くの日本人は「自分史」（先祖代々といっても精々二代前まで）を歴史と勘違いし、不都合な事実は無かったことにしているのでは。　そして虚勢を張り、札束によってアジアへの戦後処理は終わったとしています。　インドネシアで、ベトナムで信頼され、評価された多くの先輩達がいたが、いつの間にか「自己愛」に取り憑かれた人達が多い国になってしまったのでは。

アジアの国々は自分達がまだまだ発展途上国であると認識し、日本国、日本人からのサポートを期待している。　私達はアジアに対し謙虚になり、相手に親日的を求めず、自分から親アジア的になって、「互栄」の精神で肩から力を抜いて付き合っていけば明るい未来が拓けると確信している。

最後にネパールのヨード欠乏症撲滅を目指している熱田親憙画伯をご紹介します

以上